

東海道五十三次漫画絵巻

江戸時代には、歌川広重ら浮世絵師によって世に出された東海道五十三次シリーズがあり、街道や宿場の風景をうかがうことができますが、明治以降も多く画家たちが東海道を旅して、風景を絵にしたものがみられます。そのひとつに、岡本一平ら東京漫画会同人が描いた「東海道五十三次漫画絵巻」があります。

この「東海道五十三次漫画絵巻」は、東京漫画会一行 18 名が、大正 10 年（1921）5 月 1 日、メーデーで厳戒中の東京日本橋を「菅笠姿」で出発。東京から京都まで自動車でスケッチ旅行を行い、そのスケッチをもとに 150 セット作りしました。浮世絵は、ひとつのシリーズは各宿場同じ絵柄で版行されますが、この漫画絵巻は肉筆であるため、同じ宿場であっても作者が違ったり、作者が同じでも風景が異なったりしています。2 巻の軸装で、水墨、水彩画の 55 図からなり、岡本一平の箱書きがあります。

草津の絵柄は、江戸時代に浮世絵に多く紹介された草津名物「うばがもち」を取り上げています。現在も伝わる「うばもちや」とかかれた釜と店先でうばがもちを食べる姿が描かれています。

ちなみに、東京漫画会は東京在住の一流新聞漫画家で組織され、岡本一平（明治 19 年～昭和 23 年）は函館市生まれ。大正から昭和にかけて新聞や雑誌で漫画に解説文を添えた「漫画漫文」という独自のスタイルを築いて大活躍した漫画家です。

この漫画絵巻で注目されるのは、明治以降に描かれた風景であるため、江戸時代後期に歌川広重が描いた浮世絵「東海道五十三次」がベースにありながらも、まちなみの変化や、交通手段、旅風俗のうつりかわりがうかがえる興味深いものです。また、この作品は、明治以降の東海道の現状紹介に大きく寄与したものであるとともに、当時世に知られていなかった漫画の存在を PR する機会となりました。

